

* 題名中に書名が出現する場合は、引用符「」で囲みイタリック体を使用しない。

六 投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は字句の訂正に留め、組版面積に影響を与えるような改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責了とみなす。

八 刷り上り五印刷ページ（四〇〇字詰原稿用紙で一二枚）までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし実費で作製する。別刷希望者は校正刷第一頁の上方に部数を朱書すること。

一〇 原稿の送り先

〒一一三 東京都文京区本郷二丁目一一一

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学雑誌編集委員会

編集後記

今年の京都は医学会が続ぎ、まさに「医学と歴史の都」になっていた。日本医学会総会のテーマが「転換期における医学」ということだったが、転換するのは医学なのか社会なのか、また転換しているという事実なのか転換させられているという危機感なのか、あるいは転換しようとする意志なのか、色々な含みをもった言葉である。医史学がこの問題に答えを出すのはしばらく先のことになるであろう。▼京都府医師会館で六月一日・二日に開かれた第九十二回日本医史学会は天候には恵まれなかったが、京都らしい風情をたっぷり盛りこんだ和やかな豊かな学会であった。▼さて本号であるが、看護をする人々の不足が叫ばれている昨今、日頃目立たない存在の精神科の看護史に脚光を当てた岡田氏の論文が巻頭をかざっている。昨年の学会発表をまとめた力作である。二千字の発表抄録や十分たらずの口演にとどめず、是非このような論文にしてまとめて投稿していただきたい。▼本号には文芸や産業界といった他の分野との接点に注目した論文もある。医学以外の領域の膨大な文献に目を通さなければならぬから苦勞も大きいと思われるが、学問には常に専門分化と統合が要求される。六月には新しく洋学史学会が発足した。医史学会との接点も多くあるかもしれない。▼この所、編集委員会は原稿に飢えている感じがする。投稿規定を一読された上で、広く多岐にわたった論文をお送りいただきたい。担当者がうれしい悲鳴をあげるような転換期を早く迎えたものである。

(大村 敏郎)